

# 「タイ族」文化の越境と混淆

文化科学研究科・地域文化学研究専攻 伊藤 悟

## ENGLISH SUMMARY

## Research report: Transborder and hybridity of “Tai/Dai” cultures

**Satoru, Ito**

*(The Graduate University for Advanced Studies, School of Cultural and Social Studies,  
Ph.D. program in Regional Studies)*

**Key words;**

**Tai/Dai cultures, transborder, hybridity, Tai/Dai Art**

This paper is based on the research and author’s personal experience of performing music in Yunnan Province, China, and Northern Thailand. The author reports the current situation of “Tai/Dai” cultures in Yunnan and Northern Thai, and also briefly attempts to compare the features of “Tai/Dai” people’s life. Recently, their transnational exchange is getting active between “Tai/Dai” peoples who are divided by the borders along with the development of media and transportation. In addition, we notice that the hybridization of “Tai/Dai” cultures is nurtured by the interaction of cultural reconstruction and tourism industry. As the months went by, the author is unknowingly engaged on cultural transborder and hybridity of “Tai/Dai” Art.

# 「タイ族」文化の越境と混淆

文化科学研究科・地域文化学研究専攻 伊藤 悟

## 1. はじめに

筆者は1998年よりこれまで中国、タイ、ラオス、ビルマと広範囲に居住する少数民族タイ族の音楽、特に中国において近年復興と商品化が著しいフリーリード管楽器「ビー・ラムダオ」(ひょうたん笛)<sup>(1)</sup>について調査研究してきた[伊藤 2005a, 2005b]。現在の研究テーマは、文化保護と経済発展の狭間にある楽器ビー・ラムダオの復興事例に関してタイ族村落社会において長期調査を行い、音と人の関係性の変化からみる村落社会の変容を、日常実践における感覚・感性の視点から考察し、身分や性別など差異を持つ人々がいかに共同体として現代社会を生きているのか明らかにすることである。きわめて個人的でもある聴覚や嗅覚、触覚、味覚、視覚を通じて「感覚すること」、つまり感覚的認識は文化的差異があり、それら感覚はある地域や共同体の社会や文化においてハビトゥスとして反復または構築されるという前提に立つ。こうした感覚することの反復と変化に関する考察を試みることで、社会や文化のダイナミズムを理解できるのではないかと考える。

平成18年、総研大文化科学研究科海外フィールドワーク派遣事業の助成を受け2度の短期調査を行った。第1回目の調査はタイ北部と中国雲南省において平成18年2月14日から3月31日の期間、また第2回目はタイのチェンマイにおいて平成18年5月9日から5月17日に行われた。第1回目の短期調査の目的は、チェンマイ大学の国際音楽会”Roots of Asian Sound”に演奏者として参加、タイ北部のタイ族村落の近況を調査、中国雲南芸術学院での特別講義、中国のタイ族村落における長期調査のための事前調査であった。第2回目の目的は仏誕節の国際音楽祭に演奏者として参加、そしてタイ北部における現地調査であった。

本調査報告ではこれまでの調査成果に加えて、主に派遣事業による現地調査の成果を中心に報告する。ただし、時間的制約もあって上述した研究テーマの具体的なデータを提示しているわけではない。本調査報告では主にマクロな視点から「タイ族文化」の越境と混淆について述べたい。

## 2. 第1回目の事業の概要

第1回目の短期調査は、中国雲南省徳宏州のタイ族村落における長期調査のための予備調査が中心であった。さらに、異なる地域のタイ族文化を比較するため、タイ北部メーホンソン県のタイ族村落で補足調査研究を行った。また、チェンマイ大学主催の国際音楽祭”The Roots of Asian Sound”に演奏者として招かれ参加した。

筆者は調査研究活動以外に、これまで調査地で学習、習得した音楽の演奏を通じて、国際交流や異文化理解の活動を行ってきた。かつて北部タイのタイ族(タイ・ヤイ)村落にもビー・ラムダオは伝承されていたが、近年では一部の老人を除いて伝承が途切れている。しかし、近年古い音楽を復元する試みがあり、その活動の一端として筆者もビー・ラムダオを演奏した。

中国徳宏州梁河县のあるタイ族(タイ・ヌー)村落では、ビー・ラムダオの復興と中国全土における流

行によって、民間経営の楽器工房が設立された<sup>②</sup>。村落において生産された楽器は全国に流通している。また、この村落は道路整備が行われるまで長らく閉鎖的な地理環境にあった。そのため豊富な伝統文化資源と自然環境が政府の注目を集め、近年地域開発や文化復興が率先して行われるようになった。

タイ北部における調査地は、ビルマ国境に接したタイ北部メーホンソン県のタイ族（タイ・ヤイ）村落であった。調査では聞き込みや市場で売られる様々なタイ族音楽や舞踊などの芸能に関する海賊版VCDについても簡単な調査を行った。また、出家儀礼を見る機会に恵まれた。

これまでのビー・ラムダオや芸能に関する調査では以下のことも明らかになってきた。中国側で復興したタイ・ヌーやタイ・ルーの芸能や音楽が、テレビや複製メディア等によってビルマやタイにも流通している。少数民族のローカル地域の、かつトランスナショナルな流通によって、国境を越えた人々の相互作用が新たな社会現象を生み出しつつある。

### 3. 「タイ族」間の差異

ここでは中国や東南アジアで「タイ族」（Tai/Dai People）と呼ばれる人々の生活・文化の差異を提示し、次章からの考察に続けたい。

調査地である中国雲南省徳宏州には中国55少数民族のひとつ「タイ族」（漢語で「傣族」, Dai Nationality）が居住する。タイ族はその言語や生活様式等によって様々な下位集団に分類されているが、主に徳宏州には、「タイ・ヌー」、「タイ・マオ」の二つの下位集団があるとされている。また、西双版纳州には「タイ・ルー」と呼ばれる人々が居住する。

今回調査をおこなった北部タイのメーホンソンの人々は大きなタイを意味する「タイ・ヤイ」（主にタイ王国のタイ人やラオスのラオ人をタイ・ノイ、小さなタイと呼び、区別している）の自称を持つが<sup>③</sup>、伝承や歴史によれば数百年前から現在に至るまでビルマや徳宏州より移住してきた人々といわれている。現在表面的にかなりの文化的差異が感じられるタイ族だが、興味深いことに、徳宏州からビルマ、タイ北部にかけてかろうじて伝承されていた古い歌の調子等が類似している。また言語の面では、タイ王国のタイ語とは距離があるものの、タイ・ヌー、タイ・マオ、タイ・ヤイの言葉はそれぞれが方言のようなもので、意思疎通が可能である。一方では北部タイの方言もしくはタイ・ユアン方言とタイ・ルーの言葉は非常に近いといわれている。

現在も、中国とビルマ、タイにおける辺境貿易の活性化やビルマの内政事情のため、3国のタイ族の人々は越境を続けている。様々な伝統音楽や日常生活の音、自然の音が失われていく一方で、生活や様々な活動においてCDやVCDなどのメディアが新たな役割を担い始めている。タイ族語のポップスや伝統芸能などの様々な海賊版VCDやCDが3国で流通するようになった。その勢いはますます顕著になっている。

これまでの調査と本事業では中国のタイ・ヌーとタイ・マオ、そして北部タイのタイ・ヤイの環境と音について比較を行う機会に恵まれた。それぞれの地域は経済発展の差異や地理条件も異なるため今回の比較は一般化することはできないが、今後の研究にとって基礎データになると考え、以下に簡単だが文化や生活環境等の比較を述べる。

徳宏州梁河県のタイ・ヌーの人々は主に漢族文化の影響を強く受けている。一年の時間サイクルも漢族文化の影響を受け、タイ族の新年にかわって漢族の春節が一年の節目のようになっている。居住建物は1階建ての四合院風の土間式のものである。村落内の道は非常に狭く、高い住居がひしめきあってい

るため視界も狭いが、生活の様々な音は壁に反射して響き、よく聞こえる。盆地であるため、盆地の平地に田畑がひろがり、田畑を囲むように山のふもとに村がある。村には山からの湧き水が引かれ、路地のあちこちに水が流れている。高齢者は仏教を信仰するも村落にある寺には僧侶はいない。出家するものもないため、仏教儀礼は古い文字が読める老人が取り仕切る。文革時代に時刻や行事などを音で知らせた太鼓は寺にはなくなってしまったが、そのかわりにスピーカーが村に設置されている。近年若者の間では精霊信仰の影響が見受けられるようになった。今も歌垣の習慣が根付き、祝い事や祭りでは夜になると自然と歌垣がはじまる。中国政府公認のタイ・ヌー文字を使用するが、タイ・マオやタイ・ヤイの文字と類似している。経典を読み上げる際、数種類の抑揚の読み方があるが、そのひとつは以前歌われていたという歌垣の調子と類似している。

ビルマ国境付近X村のタイ・マオの人々は中国領土内でもビルマ時間で生活し、日常の経済活動ではビルマ貨幣が用いられることも多い。タイ・マオもタイ・ヤイもかつては鳥や神話の動物の型をした分銅を用いていたように、秤の基準、重量感覚は漢族のそれと異なっていた。建物は高床式であるが、かつて家畜の飼育に用いていた1階は現在居間として使用されている。各家の敷地には特に垣根は設けられておらず、道も広く、村は開放的な景観である。仏教信仰が根付いているため各家庭の2階の居間には仏壇が設けられ、また村の寺には僧侶がいる。内戦を逃れた僧侶も多く、ビルマの遠方より中国に移り住む僧侶もいる。そのため寺では一日の決まった時間に第2次大戦中の不発弾を再利用した鐘を打ち鳴らし、時報としている。かつては太鼓を用いていたが、金属の鐘は年々拡大する村の隅々まで響く。タイ・ヌーと比べて、シャーマンの存在は目に付きやすい。人によっては刺青の種類でシャーマンかどうか分かり、主に治療者としての役割が強い。タイ・ヌーの地域ではシャーマンの存在はあまり公にしないが、攻撃的な隠れシャーマンが多いという。

タイ北部のタイ・ヤイの人々はビルマの影響を強く受けている。近年、ビルマの内政事情によってビルマ側のタイ・ヤイの人々が難民としてタイに密入国するケースが増えている。高床式住居に住み、開放的な景観の家の敷地や村のあちこちには手の加わっていない木々が生えている。ほかの地域と比べて熱帯植物が多く自然環境が守られているため様々な種類の鳥や虫の鳴き声が聞こえる。様々な儀礼や活動では太鼓の音がシンボルとなる。胴の長い太鼓を用い、太鼓の低い音は倍音がよく響く。男子はそれぞれの打法を編み出し競い合い、太鼓による言語メッセージ（信号）も多く存在する。仏教信仰が根付いているため、各家庭の全ての男子は6-10歳位になると毎年4月の出家儀礼に参加し、一生に一度は短期間仏門に入る。中国側のタイ族にはタイ・ヤイのように全ての男子が出家する習慣はない。

タイ族文化において基調音となる太鼓と銅鑼について、どの地域も独特の倍音が響く象の脚に似た形状の太鼓を叩く。中国側タイ・ヌーの太鼓の胴は短く、倍音の響き方が異なる。太鼓に合わせて大小異なる5-8個の銅鑼が同時に打ち鳴らされ独特な倍音が響く。太鼓は各地域で制作者がいるが、どの地域のタイ族も銅鑼に関してはビルマから買い求められていた。そのためそれぞれの地域の銅鑼の音質や音程は非常に類似し、音が画一化されている感がある。

楽器と言語メッセージに関して言えば、タイ・ヌーの人々の間では、かつて管楽器ビー・ラムダオの音を用いて言語メッセージを伝えたといわれている。同じような言説はタイ・マオやタイ・ヤイにも聞かれるが、その詳細はわかっていない。ただし、それぞれに共通して伝承されている夜間恋愛に用いられていたビー・ラムダオや縦笛といった管楽器や胡弓や三弦琴といった弦楽器の音は細く小さい。その音は自然の音や虫の音に混じって聴こえてきたという。

人々の話し声の大きさも異なる。タイ・マオの人々の話し声は最も小さい感がある。かつて藁葺き屋

根で竹を用いた高床式住居に住んでいたためか、容易に話し声が外に漏れるため、人々の話し声は小さい。それに反して、タイ・ヌーの人々は声大きい。村の各家が背の高い土塀に囲まれていることが影響しているのかもしれない。また、タイ・ヌーの家は土塀で囲まれているものの、居間と中庭の間には壁はなく外（空）に開かれていて、寝室の外に面した壁には穴があり、外の音が聞こえるようになっている。貧しい家庭では土塀はなく、壁も竹で編んだものを用いているだけである。土レンガがどの家庭でも用いられるようになったのは近年の経済発展と政府の衛生指導による。

そのほか、歌垣に関して、韻の踏み方、言語の語彙やイントネーション、発音等の差異によってメロディーラインの構成が異なる。また、現在ほとんど歌われなくなったタイ・ヌーの「ハム・バンタオ」（古い歌）とタイ・マオとタイ・ヤイの「ハム（グワム）・ロンコン」（サルウィン川の歌）の旋律構成は類似し、かつてビー・ラムダオで演奏された。

#### 4. 第2回目の事業の概要

第2回目の調査は、仏誕節にチェンマイ大学とマハチュラロンゴン仏教大学が提携して開催された“The project of International Dharma Music on Visakha Puja Day”に報告者が楽器「ビー・ラムダオ」の「演奏者」として参加すること、また活動の参加を通して資料収集を行うことが目的であった。演奏による儀礼への参加はチェンマイ大学およびマハチュラロンゴン仏教大学より招待を受けたものである。

本事業で参加・調査した仏誕節は一年の仏教儀礼のなかでもっとも厳かに行われる。特に、5月12日は旧暦6月の満月の日で、釈迦の生誕、大悟、入滅の日とされる。仏教寺院では早朝から経が唱えられる。在家信者たちは托鉢を行ったり、前日から寺院におまいりしたり、仏、法、僧に帰依するためにローソクをもって本道を3度回る行事ウィアン・ティアンを行う。チェンマイでは11日深夜より、市内外の人々がこぞって徒歩で4、5時間かけてステープ山に登り、山腹にある寺院を目指す。元来、ステープ山の登山は夜明けからの仏教儀礼に参加するか、托鉢に行くかなどの目的のために村ごとにグループを組み、白装束をまとって粛々と登山したというが、ここ数年でそうした厳格な雰囲気は感じられなくなったという。

現在も功德を積む目的で登山する人々もいるが、学校の新入生の通過儀礼のイベントであり、男女の出会いの場でもあり、露店による経済活動の場でもある。夜通し、山のふもとから山腹までの14キロに及ぶ道路には露店が立ち並び、老若男女が連なって歩く。銅鑼やシンバルや太鼓を敲いて踊りながら山に登るものもいる。観光で来た僧侶をのせた車やタクシーが渋滞を作り、道路は混雑していた。

今回参加した国際音楽会もこの数年に新たに企画された活動である。国際音楽祭は毎年世界の様々な仏教国から音楽家を招待し、数日間ワット・スワンドークやワット・ドイステープにおいてコンサートを行う。今回は、チェンマイの演奏グループが6組演奏したほか、カレン族の演奏家や、タイのイサーン地域、ラオス、インド、日本の演奏家（筆者）たちが演奏を行った。内容は、歌手が釈迦の一生や仏教の教義を歌ったり、仏誕節を祝ったりするものであった。

## 5. 「タイ族」文化の接合

チェンマイで行われた仏誕節は、以前は敬虔な仏教徒たちにとって厳かな一日であった。現在では国民にとってのイベントという側面がある。今のところ、観光資源として宣伝はされていないものの、北部タイの新旧入り混じった芸能や国外の芸能を享受できる機会であり、今後は政府機関との提携によってますますスペクタクル化されるだろう。しかし、ワット・ドイステープに見られるような祭としての華やかな表舞台とは逆に、寺院の境内に入ると、軒下で白装束を着た敬虔な在家信者や尼僧が隙間なく横になって12日の夜明けを待っている。

にぎやかな外と壁で仕切られただけの境内では、人々は線香とつぼみのついた蓮を両掌ではさんで持ち、金箔の張られた黄金に輝く仏塔の周りを祈りながら三度回っている。壁で仕切られてはいるものの外側の銅鑼やシンバル、太鼓などのにぎやかな音が聴こえる。

境内で粛々と儀礼が始まる時を待つ在家信者や出家した尼僧たちにとって、音楽は世俗のものである。音を聴いても「興味はない」としてじっと身体を休めていた。なかには昔のような静かな仏誕節の迎え方が懐かしいというものもいた。

演奏者として今回の仏教儀礼に参加することで調査者自らが傍観者とは異なる位置にあったが、実際演奏会の意図が仏教儀礼や信仰に向かっていくものではなく、近年見られる北部タイのランナー文化の復興、近年知識人たちに呼ばれる「ネオ・ランナー文化」のパフォーマンスの舞台として催されたため、信仰とはかけ離れた次元にいるようだった。

調査者が演奏したビー・ラムダオは中国徳宏州のタイ・ヌーやタイ・マオ、ビルマやそのほかの中国諸地域に住むタイ・ヤイや山地民が演奏していた楽器であった。しかし、これまで調査者が参加してきた北部タイの演奏会では「中国のシーサンパンナ（西双版纳州）からきた楽器」として紹介されることが多かった。

シーサンパンナは新中国成立までタイ系民族タイ・ルーが王国を築いていた。また、チェンマイとは政治経済や芸術など歴史的に古くからつながりがあった。近年、チェンマイから飛行機の直行便も通じ、シーサンパンナはチェンマイの人々にとってますます身近な存在になっている。しかし、これまで伝統的にシーサンパンナではビー・ラムダオは用いられてこなかった。シーサンパンナは雲南省の中でも観光開発が進んでいる地域である。ビー・ラムダオは商品として中国全土で流行しているが、シーサンパンナではタイ・ヌーのビー・ラムダオを同じ「タイ族」という民族カテゴリーの楽器として観光業などと結びつき全面的に売り出している。

中国中央政府によって公定された少数民族「タイ族」という民族カテゴリーによって、もともとは交流が少なかった中国各地のタイ族下位集団間の交流が促進されるようになった。民族カテゴリーによって上からの画一化があるその一方で、ビー・ラムダオを雲南省のみならず全国で広めたタイ・ヌーの楽器制作・演奏家エン・ダーチュエン氏のように諸地域のタイ族の人々は積極的に民族カテゴリーを利用するものもいる。さまざまな相互作用の中で、中国各タイ族地域間では文化の接合がおこなわれている。

中国における「タイ族」文化の接合同様に、観光業の発展とランナー文化復興活動の相互作用によって、北部タイ、チェンマイを中心に「タイ族」文化の接合が見られる。現在、タイやビルマ、中国、ラオスなどに複雑に分布するタイ・ユアンやタイ・ルー、タイ・ヤイ、タイ・クンといったさまざまなタイ族下位集団の文化が「ネオ・ランナー文化」として接合されている。例えば、タイ・ヤイの伝統衣装やテキスタイル、楽器、舞踏、音楽などは、タイ・ヤイ自身の継承者が減少する一方で、チェンマ

イの芸術家や学生などが新たな継承者となっている。そうした芸能が演じられる北部タイのリゾートホテルでは、さまざまなタイ族の建築を復元したり、建築様式を混淆した建物を生み出したり、物質的側面でもネオ・ラーナー文化が表象されている。また、日常生活用品から仏像や寺の装飾物にいたる多種多様なアンティークがシーサンパンナと特にビルマのタイ族地域から収集され展示されている。王室がシンボルとなり伝統文化が厳格に継承される中央タイの「タイ文化」に対し、チェンマイを中心とした北部タイでは「タイ族文化」の混淆が意識的に行われている。

## 6. タイ・ヤイ文化復興の動向

北部タイにおけるビー・ラムダオの伝承状況を見ると、すでにタイ・ヤイの村でも見かけることはない。実物はメーホンソンのワット・ジョンカムに併設されている小さな博物館に保存されているくらいである。チェンマイ市内にあるワット・パパオでもタイ・ヤイ文化博物館の建設を予定しているが、展示品の収集が難航している。しかし、現在では中国側で制作されたビー・ラムダオのCDやVCDの海賊版がビルマを経由して北部タイ、主にタイ・ヤイ居住地域で販売されるようになり、再び身近な存在になりつつある。

現在のところ、大々的なタイ・ヤイの文化復興運動は起きていない。個人レベルで数名のタイ・ヤイの人々が文化保存に努めている。そのなかでビルマより難民として逃れてきたタイ・ヤイのK氏は主に自己資金で情報収集、芸能の後継者の育成を行っている。ただし、K氏のもとでタイ・ヤイの芸能を学ぶ若者のほとんどが「タイ人」であって、タイ・ヤイのアイデンティティを持った若者ではない。

近年K氏は国境近辺の学校でタイ・ヤイの子供たちに伝統舞踊を教える活動も行い始めた。しかしそうしたビルマのタイ・ヤイのK氏がタイ国内でおこなう試みにたいして、タイ国民としてアイデンティティを持つタイ・ヤイの人々から「よそのもの」として軽蔑されることもある。

筆者とK氏の交友関係は数年に及び、これまで様々な情報交換を行ってきた。筆者が2001年から2002年にかけて北部タイに滞在して音楽活動を行っていた際、K氏は筆者の演奏を見て「ビー・ラムダオを聴いたのはこれが3度目だ」と述べたことがあった。その後K氏はビー・ラムダオの復興を願い、タイ北部タイ・ヤイ居住地域で楽器の制作・演奏ができる老人を探した。K氏の話では、ビエンルアン地域にタイ王国出身のタイ・ヤイで63歳の老人男性がただ一人だけ今でもビー・ラムダオの演奏・制作技術を継承しているという<sup>(4)</sup>。K氏の働きかけでようやく弟子を持つようになり、また、近所の老人たちも楽器を趣味で演奏するようになったという。

K氏のような数少ない伝統文化や知識の担い手たちは後継者の育成と失われつつある文化の復興を人々に呼びかける。タイ・ヤイの知識人たちの語りでは、「タイ族（タイ・ヤイ）は3つの現代国家（ビルマ、中国、タイ）によって分断されてしまった」ということを強調し、それぞれの国家に居住する人々に対してタイ族としての民族アイデンティティの強化を訴える。

タイ・ヤイの物質文化と非物質文化がチェンマイを中心とするネオ・ラーナー文化に吸収されつつ変えられていく一方で、タイにおいて少数民族であるタイ・ヤイの知識人たちはアイデンティティの凝集力をもつ伝統文化を取り戻し継承することを重要な課題として掲げている。そしてこうした文化の相互作用の中に中国側のタイ族文化復興活動の影もみられる。



## 7. むすびにかえて

本報告では巨視的な視点から、タイ・ヌー、タイ・マオ、タイ・ヤイ、北部タイ・チェンマイの人々の「タイ族文化」を概観した。それぞれの地域、それぞれの人々が多様な方法でお互いの存在を意識しながら「タイ族らしさ」を表象していることがわかる。同じ「タイ族」という拡大されたアイデンティティのもと、人々は自分たちの社会や文化を参照しながら、異なる文化要素を解釈して自らのカテゴリーに取り込んでしまう。

「タイ族」ではない日本人の筆者は、タイ北部ではネオ・ランナー文化の舞台であるリゾートホテルの晩餐会や様々な演奏会でタイ人の友人たちと共に演奏している。また、中国では地域レベルの祭りでの演奏以外に、1999年にエン・ダーチュエン氏（偲德全）が出版した中国初のビー・ラムダオのVCD『傣風神韻』（昆明：雲南音像出版）に参加した。消失の危機にあるタイ・ヌー伝統曲「古調」（ハム・バンタオ）という曲目において、筆者はエン・ダーチュエン氏と金髪のフランス人女性と共演している<sup>5)</sup>。そのVCDは今も3国のどこかで海賊版として流通し続けている。筆者は知らず知らずの間に彼らの文化の接合や復興の行為に参加し、人々はこうした特殊な存在の筆者のビー・ラムダオの演奏を通じて、古く、身近で、新たな文化要素を吸収している。

## 謝 辞

本調査報告は、2度の平成18年度総研大文化科学研究科海外フィールドワーク派遣事業の助成を受けて行われた。また、調査報告の一部の成果は、平成18年度笹川科学研究助成を受けて現在行われている長期調査による。ここに記して謝意を表します。

- <sup>1</sup> 「ビー・ラムダオ」は諸タイ族語で「ひょうたんの笛」の意味。中国では60年代より漢語で「葫芦絲（フルス）」と呼ばれている。
- <sup>2</sup> 2006年9月には、生産される楽器の質を向上させる問題が解決せず、すでに村落の工房は解散していた。そのかわり各職人がそれぞれ楽器を制作し、昆明の工房が基準に合格した楽器を買い上げるという歩合制のシステムに変わった。
- <sup>3</sup> ビルマでは「シャン」と呼ばれる。
- <sup>4</sup> 2006年11月にタイ北部で追加調査を行った。その際にピエンルアンにはもう一人の老人がひょうたん笛を制作できることがわかった。今も各地では楽器を演奏できる老人は多くいるが、調査の時間的制約のため曲の意味を詳しく述べられる老人にはまだ出会えない。
- <sup>5</sup> 現在、徳宏州梁河県では、伝統曲「古調」（ハム・バンタオ）を国家レベルの無形文化財に申請する予定でいる。

## 参考文献

伊藤 悟

- 2005a 『徳宏タイ族の楽器「ビー・ラムダオ」と音の文化の変容』『族』36号：1-22。
- 2005b 「试论德宏傣族乐器“箏朗道”的现状与发展」徳宏州傣学学会編『中国・徳宏云南四江流域傣族文化比较国际学术研讨会论文集』徳宏民族出版社：389-414。